

参加者氏名：中川武司

卒業年 1975年 卒業学部 経営学部

私が働いている会社と滋賀県長浜市との間で、「災害時における段ボール製ベッドの供給に関する協定」を、四月十八日に交わしました。偶然ですが、調印式の数日前に熊本地震が発生し、調印式の取材をされた新聞社の記者から、災害地で利用されている段ボール製ベッドについて、色々と質問を受けました。

そんな経緯で、震災後の福島を自分の目で見ておこうという思いで応募いたしました。晩秋の中、快晴に恵まれた中身の濃い充実した二日間でした。私たちの受け入れやスケジュール作成に、ご尽力いただいた事務局と福島校友会の皆様方に深く御礼を申し上げます。

さて、今回の東北応援ツアーでは、いかに自分自身の目で見て、自分の耳で聞いてみるのが大事かという事を、改めて再確認いたしました。浪江町の副町長自ら私たちのバスに乗っていただき、合同霊園前の高台や全く人気の無い浪江地区の住宅地を歩きながら説明を聴くことが出来ました。

本間副町長は、この後の勉強会の講師である福島大学学長のゼミ卒業生とのこと。この中井学長も立命館大学校友で、不思議なご縁を感じました。また、今回参加させていただいた皆様方と地域と年齢を超えて意見や感想を聞かせていただくなど、交流を深めることもできました。

今迄、余り関心もなく聞き流していた福島の農産物は、全数検査を経て安全性を確認後に出荷されていることも改めて知ることが出来ました。未だに払拭されることのない風評被害に対して、私たちがたった二日間でしたが、自分の目で見て感じてきたことを正しく伝えることで、福島校友会の皆様方のご厚情に報いたいと思いました。

漠然とした不安は、放射線という把握しづらいところから生み出されてい

ると思われました。正しい知識を持つことで、福島県の実業を正しく理解できるのだと感じました。

また、この貴重な体験で得たことを周囲の方々に正しく伝えることで、ご厚情に報いたいと思います。

長引けば長引くほど、避難した地域でのコミュニティとの係わりが生れ、避難解除されても、早々に自宅へ戻る人は10%に満たないとか。

最大の問題は雇用であり、避難されたところでの新たなコミュニティとの係わり、子どもの学校の問題、避難したところの方が利便性が良い時には中々離れづらくなる・・・など、単純に自宅へ戻れない事情が山積みだとか・・・。

私たちにわかり易く教えて戴きました。

貴重な体験をさせていただきました校友会事務局と現地校友会の皆様方に重ねて御礼を申し上げます。